

徳間文庫

特急ワイドビューひだ殺人事件

西村京太郎



徳間書店

徳間文庫



とつきゆう さつじん じ けん
特急ワイドビューひだ殺人事件

© Kyôtarô Nishimura 1995

1995年11月15日 初刷

著者 西村京太郎 にしむらきやうたろう

発行者 徳間康快 とくま やすよし

発行所 東京都港区東新橋一丁目一〇五
株式会社 徳間書店

電話(〇三)三五七三・〇一一(大代)
振替 〇〇一四〇一〇一四四三九二

印刷

凸版印刷株式会社

製本

編集担当 高田暁郎

ISBN4-19-890420-0 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

特急ワイドビューひだ殺人事件

目次

第一章	1031D	5
第二章	若い乗客	51
第三章	連結	90
第四章	戦いの始まり	145
第五章	のぞみ19号	195
第六章	終局への加速	234
巻末	著書リスト	山前譲

第一章 1031D

1

警視庁捜査一課の十津川^{とつがわ}は、朝食の時、新聞に、丹念に眼を通す。

とっている新聞の全てにである。そのため、妻の直子に、時々、嫌味をいわれるのだが、それでも、十津川は、止め^やめようとしなかった。

警察は、事件が、起きてから、はじめて、行動を開始する。捜査一課についていえば、強盗、殺人などが、起きてから、動き出すということになる。

だが、十津川が、いつも感じるのは、事件を、なぜ、未然に防げないのだろうかということ

だった。

死体が見つかってから、警察は動き出すのだが、犯人から見れば、それは、事件の初めではなく、終りなのである。

犯人が、殺人計画を立てた時に、介入することが出来れば、理屈上は、事件を、未然に防げるわけである。

突発的な事件を防ぐことは、まず、不可能だが、この社会の何処かで、ひそかに、殺人計画が、練られているとすれば、それを、知りたいと、思うのだ。

だから、十津川は、入念に、新聞に眼を通す。事件を通す以外に、社会をのぞく方法は、マスコミ、特に、新聞を見るより他に、方法がなかったからである。

特に、三行広告に、十津川は、興味を持っていた。

前に、誘拐事件があり、犯人は、身代金の要求に、三行広告の尋ね人の欄を利用した。被害者が、最初、警察に届け出なかったのも、危うく、見過ごすところだったが、奇妙な尋ね人の広告に注目していたら、気付いた筈なのである。

それ以来、三行広告に注意するようになったのだが、不思議な広告というものは、なかなか見つからなかった。

(まあ、そうそう、妙な三行広告がある筈がないか)

と、思いながら、今日も、新聞のページを繰っていたのだが、その視線が、急に止まった。

へヒロシ 1031Dのことで話がついた。すぐ帰れ。

母

この尋ね人の広告が、十津川を引きつけたのだ。のっていたのは、S新聞だった。普通に考えれば、家出した息子に、母親が、帰ってくれと、呼びかけているのだと思う。だが、前の誘拐事件の時も、尋ね人欄にのったのは、ありふれた文面だった。

へ匂子 すぐ帰れ

母

それが身代金の要求に対して、イエスという返事だったのだ。子供を誘拐した犯人が、両親に対して、もし、身代金を払う意志があるなら、この文面の広告を、新聞にのせると、要求したのである。

もちろん、今朝の新聞にのったものが、それと同じだと、断定できない。

それに、誘拐犯人なら、努めて、平凡な広告をのせるように、要求するだろう。妙な文面の広告をのせて、警察や、マスコミの注意を引いては、まずいからだ。

それを考えると、今朝の、この広告は、奇妙すぎる。

誘拐の時の尋ね人の広告に、十津川が、引かれたのは、匂子という名前だった。最初は、誘

拐とは思わず、妙な名前だなど、思っただけだった。そのことが、記憶に残っていたところへ、K製薬社長の一人娘が、失踪したらしいという噂が、流れてきた。しかも、その娘の名前は、匂子。源氏物語が好きだった祖母が、名付けたという。めったにある名前ではない。

その上、内密に調べてみると、母親は、二年前に病死していることがわかった。

その二つから、十津川は、誘拐ではないかと推理して、社長を説得し、身代金の受け渡しの際に、犯人を逮捕し、人質を助け出すことが出来た。

今日の三行広告にも、十津川は、同じように、不審な感じを受けた。

そう思うと、無視できない性格だった。その新聞を持って警視庁に出勤すると、十津川は、S新聞の案内広告を扱っているS広告社に、電話してみた。

相手は、こちらが警察と聞いて、緊張した声になり、

「あの広告に、何か問題が起きましたか？」

「いや。そういうことじゃないんですが、どんな人が、申込んだのかと、思いましてね」

「ちょっと、待って下さい」

と、相手は、いい、

「ええと、東京都世田谷区×丁目の谷沢優子という人ですね」

「いくつぐらいの人ですか？」

「それは、わかりません」

「わからないというのは、どういうことですか？」

「あの案内広告は、現金書留で、送られて来ましてね。所定の料金と、文面が書いてあったので、のせたわけです」

「そういうことが、よくあるんですか？」

「よくということはありますが、時々、あります。こちらとしては、料金さえ払って下されば、のせるのが、仕事ですから」

と、相手は、いった。

「依頼者の谷沢優子という人の電話番号は、わかりませんか？」

「それは、書いてありませんでしたねえ」

と、相手は、いう。

十津川は、電話を切ったが、今度は、一〇四にかけ、住所と名前をいって、電話番号を調べて欲しいと、頼んだ。

「その番地に、谷沢優子さんという方は、住んでいないようです。その番号の住人は、片岡俊一という方です」

「電話番号は、わかりますか？」

「片岡俊一さんの電話番号は、3×××の××××です」

と、交換手は、教えてくれた。

十津川は、行きがかりで、次に、その番号に、かけた。

「片岡でございますか」

と、女の声の応答があった。

「失礼ですが、そちらに、谷沢優子という方がいらっしゃいませんか？」

「いえ。そんな方は、うちには、いらっしゃいませんわ」

と、相手は、いった。

2

「何を、そんなに、熱心に、調べておられるんですか？」

と、亀井^{かみい}刑事が、声をかけてきた。

「ちょっと、気になったことがあってね」

と、十津川は、いい、例の新聞の三行広告を見せた。

亀井は、ぎっと、眼を通して、

「なるほど。1031Dというのが、何のことか、わかりませんね」

「今が、十月なら、十月三十一日じゃないかと思うんだが、今は三月だからね。それにこれが日付としても、Dの意味が、わからない」

と、十津川は、いった。

「暗号みたいな数字ですね」

「それに、現金書留で、料金を送りつけた谷沢優子は、多分、偽名だ」

「ますます、妙な案内広告ということになってきますね」

「ああ、それで、気になってね」

と、十津川は、いった。

「片岡という人間を、調べてみますか？」

「いや、それはいい。これが、何かの事件に関係があるという証拠は、何もないんだから」

と、いって、十津川は、断った。

前の「尋ね人」は、誘拐事件につながっていたが、今日の案内広告が、何かの事件、それも、捜査一課が扱う事件につながるという証拠も、確信もなかったからである。

この日の夜、新宿で、殺人事件が発生し、十津川は、案内広告のことは忘れて、亀井たちを連れて、現場に急行した。

場所は、新宿御苑ぎよえんの前の通りだった。新宿二丁目に近い。

狭い歩道の上に、男の死体が、横たわっているのが、発見されたのだ。

午後十二時に近くなると、歌舞伎町かぶき辺りは、まだ賑やかだが、さすがに、御苑は暗く、道路の向い側の店も、すでに、閉めてしまつて、街灯だけの明るさになってしまう。

その薄暗い歩道を、警邏で歩いていた二人の警官が、発見者だった。

十津川は、投光器の明りの中に、俯せに横たわっている男の死体を見つめた。

ハーフコートの背中を、刺されているのだが、血は、白いコートまで、滲み出ていないので、警官が、最初、酔っ払いが倒れていると思ったのも、肯ける。

死体を仰向けにする。二十七、八歳の若い男の顔が、現われた。コートの下は背広で、きちんと、ネクタイをしている。サラリーマンの感じだった。

亀井が、屈み込み、男のポケットを、調べた。財布は、失くしているが、運転免許証は、見つかった。亀井が、それを、十津川に渡した。

へ木下広 杉並区高円寺

コーポ高円寺204

運転免許証にあった名前と住所である。年齢は二十八歳とわかった。他に、ダンヒルの腕時計、自分の名刺六枚の入った名刺入れ、ラークと、百円ライター、それが、所持品だった。財布の他に、キーホルダーが、見つからない。

（キーホルダーを、犯人が盗ったとすると、その目的は、何だろう？ 被害者が、車でここへ来たのなら、車を盗むことだが、そうでないとしたら？——）

「カメさん。被害者のマンションへ行ってみよう」

と、十津川は、急に、いった。

パトカーで、高円寺に向った。コーポ高円寺を見つけ、204号室にあがる。ドアは、開いていた。電気が点けっ放しになっている2DKの部屋に入ると、十津川は、やっぱり、思った。

部屋が、引っかけ廻まわされていたからだった。

「やられましたね」

と、亀井が、舌打ちする。明らかに、犯人がキーを盗み、この部屋を開け、何かを探し廻ったのである。

「徹底的にやってますね」

亀井が、改めて部屋を見廻しながら、いった。

「多分、犯人は、木下広を殺して、ポケットを調べたが、求めるものが、見つからなかった。そこで、キーホルダーを奪い、部屋を開けて、探したんだ」

と、十津川は、いった。

「何を、探したんでしょうか？」

「見当もつかないね」

と、十津川は、正直に、いった。

とにかく、二人は、荒された部屋の中を、調べてみることにした。

洋服ダンスは、中身の服や、ズボンが放り出され、引出しは、全部、開けられている。寢室のベッドは、引き剝がされ、押入れの毛布、座布団なども、引きずり出されていた。

二人は、足元に気をつけながら、引出しの中身を調べ、押入れの奥に、首を突っ込んだ。
「貯金通帳と、印鑑は、盗まれていませんね」

と、亀井が、その二つを見つけて、十津川に、いった。

「預金の残高は？」

「二百十六万五千二百円」

「犯人は、金には用が無かったらしいな」

「そうですね。他のものを、探していたんでしょう」

「それを見つけたのかな？」

と、十津川は、呟いた。その答は、十津川自身にも、わからなかった。まだ、被害者のことが、よくわかっていなかったからだ。

被害者の持っていた名刺には、N建設資材部資材一課の肩書が、あった。

N建設といえば、中堅の建設会社である。

夜が明けてから、十津川は、亀井とN建設に行き、殺された木下広のことを、聞いた。
まず会ったのは、資材一課の新井という課長だった。

「木下君は、優秀な社員で、来月の人事異動で、係長になる予定でした」

と、新井は、いった。

「誰かに、恨まれていたということはありませんか？」

と、十津川は、きいてみた。

「多少、血の気の多いところはありましたが、若いから、仕方がないでしょう。明るくて、いい男でした。敵を作るような人間じゃありません」

「独身でしたね？」

「そうです。いい青年なんで、見合いをすすめたが、断られました。恋人がいたようです」

「名前は、わかりますか？」

「同じ資材部の管理課の女の子らしいんですが、私は、名前は、知りません」

と、新井は、いった。

十津川たちが調べた結果、それは、原みどりという二十三歳の女性とわかった。

彼女は、木下広と、つき合っていたことは認めたが、結婚は、約束してなかったと、いった。彼も、結婚は、三十過ぎてからだといったし、私も、今すぐという気はなかったから」と、みどりは、いった。

木下の死には、びっくりしていたが、それほど悲しんでいるようには、見えなかった。その程度のつき合いだったということなのだろう。上司の見合いのすすめを断ったのも、結婚相手